【国語科】教科提案

「発想力」「論理力」「表現力」を育てる
～言葉にこだわった，対象・他者・自己との対話を通して～

１．研究テーマ設定の理由

（１）国語科でめざす子ども像から

まずはどの子にもテキストに対して自分なりの思いや考えをもてるようになってほしいとの願いから，対象と対話する力を磨き**発想力**をつけたいと考える。加えて，テキスト中の言葉にこだわりながら，その考えの根拠を大切にし明らかにすることの積み重ねにより，**論理力**もつけたい。また，言葉にこだわってより良く伝え合えるようになるためには，対象との対話により言葉にこだわるのはもちろん，相手意識をもち論理的で説得力のある話し方をしたり，受容的でしかも批判的に比較しながら聞いたりと，他者と対話する力を磨き**論理力・表現力**をつける必要がある。そうして，対象との対話・他者との対話では，常に自己との対話をしっかり行えるよう支援したいし，それができる子どもであってほしいと願っている。対象や他者に問いかけ，自分なりの考えをもち，自分なりの言葉で表現する。そんな主体的な取り組みによる自らの高まり・成長，時には自身の課題とも対話することが，学ぶ喜び・励み・意欲となるし，また確かで豊かな**発想力・論理力・表現力**となる。さらには，次からの「対話力」（対話する力）となって生きると考える。

以上のような考えにより，**国語科のめざす子ども像**を次のようにおきたい。

①対象･他者･自己との対話を言葉にこだわって行える子ども。
②発想力･論理力･表現力のある子ども。

（２）学校提案とのかかわりから

国語科にかかわらず，「学びの質の高まり」を実現させるためには，学校提案に示している通り，子どもが「対象・他者・自己との３つの対話」をじっくり行うことが必要条件となる。しかし，それを支える**発想力・論理力・表現力**が備わっていなければ，十分な対話は実現できない。

「発想力」「論理力」「表現力」を育てる～言葉にこだわった、対象･他者･自己との対話を通して～は，テーマとサブテーマの相関を、相互作用としてともに育てたいと考えている。

２．国語科学習における「学びの質の高まり」

「学びの質の高まり」をめざして，我々は，子ども一人一人が，対象・他者・自己のそれぞれに，あるいは複合的に，充実した対話ができるためのみとりと支援を特に重視して行いたい。

国語科における学びの質の高まりは，対象・他者・自己との対話を深めることにより，新たな視点や根拠を加えることができたり，言葉と言葉・文と文を関連づけながら論理的・多面的・総合的に考えたり理解したり表現したりすることであるといえよう。

３．研究の展望

対象・他者・自己との３つの対話は，それぞれが全く別々に行われるものではない。常に２つあるいは３つが複合的に行われるものである。しかし，ぞれぞれの対話において，特有の願う姿や力をつけていくための手立ては存在する。

① 対象との対話においては，

まず子どもたちが対象に対して問い続け，テキストを理解・評価しながら読むことで，自分なりの問題意識や考えをしっかりともてることを目標としたい。その際，文章に即して考えることや確かな根拠をテキストの言葉に求めること，原因と結果，あるいは意見と理由の関係を明らかにすることなどを大切にし，**論理的な思考をともなう「読む力」**の育成をめざしたい。「一人読み」として書き込みの時間を十分に確保し，課題に即した書き込みから，自らの問いに対する自らの考えを根拠を大切にしながら書いていくといった方向への内容的な転換を模索していきたい。また，低学年においては，その言葉，文章，場面に対して想像を豊かに働かせたいと考える際，「コラボレーションタイム」を積極的に授業展開に位置付け，「どんな表情？どんな動き？」などペアによる具体的な問いかけ合いを行いたい。

②他者との対話においては，

受容的に仲間の考えを受け止め，自分との違いや仲間の考えの良さを認め，また「どうして？」と問いかけながら**建設的かつ批判的な思考を伴う「聞く力」**と，その良さを生かし取り込んで生まれた新たな考えを，**自分の言葉で説得力をもって「話す力」**に力点を置き，相手や場・状況に応じ，分かりやすく**論理的に表現する力**を伸ばしたい。そのため，ペアやグループなどといった学習形態や，シンポジウム・パネルディスカッション・バズセッション・ディベートなど討論形式を工夫して活性化を図りながら，実際に伝え合う場を積極的に設定し，これまで発言が消極的だった子も少しずつその機会をもてるよう日常的に努めていきたい。特に高学年では，小グループでは発言できても，全体の中ではせっかくの深まりある考えが表出されないままに終わることもある。「アシスト発言」を意識することで，そういった意見を導き出し，グループでの話し合いを全体の場に効果的に活かしていけるように取り組んでいる。

また，低学年の段階においては，話型指導を徹底することで，**論理力と表現力**の基礎を培っていきたい。もちろん，学年が上がるにつれてモノローグ型からダイアローグ型の話し方へとステップをめざしたい。そこでは，聞き手を意識した表現が必要であり，これまでの話型をやぶり，仮に文としての整合性が多少欠けてでも，自然で説得力のある会話体での伝え合いができるよう，系統性をもって指導にあたりたい。

なお，こうした対象・他者との対話によってもてた幅の広いものの見方・考え方が，次からの豊かな**発想力**に結びつくと考えている。

③自己との対話においては，

対象や他者との対話と関連づけながら自分自身の学びを見つめ，高まりや変容，あるいは疑問やさらなる問いについて**振り返りながら言葉にこだわって書く機会を重視し，「書く力」**も身につけさせたい。特に中学年では，仲間の考えを聞き，中央に置いた自分の考えとの違いを整理しながら「思い地図」に意見内容の要点を書きまとめていく活動を取り入れている。他者との対話は，常に自己との対話を通して行われ，**表現力・論理力**を高めている。

自己評価活動を積極的に取り入れていくことは，子ども自身が自らの対話力を見つめ直すことになり，対象・他者・自己との対話をより強く意識して学びを進めていけると考える。また，他者との対話による自己変革の気づきや確かめは，学ぶ喜びやさらなる意欲ともなる。指導者側にとっても，書くことを取り入れた自己評価は，子ども一人一人の学びをより的確にみとり，より適切に目標をたてたり支援したりと，目標・指導・評価の一体化を図るための有効な手立てとなる。

④加えて，発想力・論理力・表現力のスキルをアップするためにも，

たとえばメソッドやワークシートなども工夫し，朝学の時間で意識的に実施していきたい。
発想力については，自由に発想しかつ語彙を増やせるようにとの願いから，特に低学年段階で，フィンランドのアヤトゥス・カルタ（ウェブ図）を。
論理力については，視点を変えて文を書き換えたり，新聞記事などを積極的に活用し，一言で，あるいは字数制限のある中で感想を述べたり論点をまとめたりする学習を。
表現力については，ＩＣレコーダーやビデオを活用し，音読や動作化などの音声言語・表現活動の実際を記録し，課題や成長の自己評価や相互評価を。また実際に考えて話す機会を積極的に入れ。

４．成果と課題の把握の手立て

例えば１学期の初発の感想と３学期のそれを比較し，長期的な成果と課題の把握を図りたい。もちろん，実際の授業での学びの足跡を振り返り，それぞれの時間や単元の終末といった短いスパンでも，発言や表情，ノートやワークシートへの記述内容などにより子どもの現状把握に努め，一人一人の成長を評価していきたい。同時に，子どもの自己・相互評価活動も充実させることで，意欲や課題意識をもたせ，自己認識力も育てたい。

発達段階や対象のもつ意味を踏まえつつ，**発想力**は加えられた視点や語彙の豊かさなどを，**論理力**は主題や論点・根拠の確かさなどを，**表現力**は話し方や読み方・表現活動の実際などを，比較・評価の観点とおきたい。そのためにも，**発想力・論理力・表現力**については単元によりいずれかに重点化を図り，また，単元や各時間の目標として位置づけるなど，３つの力を意識しながら一人一人の学びをじっくりとみとり，確かな学びの質の高まりをめざして支援していきたい。

さらに，年間を通した着目児を置いて評価活動を継続することで，あいまいで感覚的な評価に陥らないよう留意し，指導者側からの成果と課題の把握に努め，今後の指導に活かしていきたい。